表 21 在宅訪問指導を行うための業務環境に関する集計

	回答率	15 分以下	15～30 分	30～60 分	60 分以上	
患者宅への往復時間	94.2%	45 (22.4%)	105 (52.2%)	47 (23.4%)	4 (2.00%)	
	回答率	10 分以下	10～30 分	30～60 分	60 分以上	
患者との面談時間	94.2%	67 (33.3%)	126 (62.7%)	7 (3.48%)	1 (0.50%)	
	回答率	10%以下	10～50%	50%以上	不明	
独居患者の割合	87.9%	78 (40.2%)	93 (47.9%)	21 (10.8%)	2 (1.03%)	
	回答率	10%以下	10～50%	50%以上	不明	
老齢介護の割合	86.1%	56 (29.5%)	92 (48.4%)	38 (20.0%)	4 (2.11%)	
	回答率	15 分以下	15～30 分	30～60 分	60 分以上	不明
主治医の往復時間	87.4%	44 (22.7%)	78 (40.2%)	31 (16.0%)	1 (0.52%)	40 (20.6%)

474 施設の内、223 施設（47.0%）より回答を得た。データは回答施設数（n）、括弧内の数値は有効回答数に対する割合を示す。

表 22 在宅訪問指導における副作用対策への介入事例：アンケート調査にて、在宅訪問指導における副作用対策への介入事例について記載を依頼した。得られた回答から代表的なものを抽出し、下記に記載した。

分類	症例詳細
副作用の発見	年齢:90 才女性、高血圧症、多発性脳梗塞、鉄欠乏性貧血、胆のう結石症、不眠症。服薬管理は家族(娘)が行っている。現在結核治療中。イスコチン、リファンピシン、エブトール服用。結核治療開始後 2 ヶ月目、訪問時の聞き取りにて"視力低下ぎみ"との訴え有。(新聞を読まなくなった)呼吸器科の検査受診予約日が近く、元々白内障歴もあった為、受診時に視力について Dr に伝える旨指導し、往診担当 Dr へもあわせてレポートにて情報提供した。呼吸器･眼科受診、因果関係は不明であるが、エブトールは中止となった。
副作用の発見	A さん 76 歳脳梗塞後の半身マヒ、介護 A さんの夫同年代、年金生活、風邪様症状により Dr 往診され訪問でお薬処方、により患者さん宅訪問抗生剤 5 日分をおわたし、説明、本人さん元気だったので、おはなし後帰局　のみ始めて、1 日たった時、患者様の家族より、A さんかゆみが全身に出てとの連絡を受ける。(TEL にて)症状を医師看護師につたえたか確認、伝えてないとの事で、すぐ Dr に連絡、Dr 往診にて、抗生剤により薬疹との事で中止、抗ヒスタミン薬処方をおもちして、薬疹はひいた。
過量投与	87 才認知症　睡眠時無呼吸症候群　気管支喘息など　キーパーソン妻(認知症)介護に対する拒否や不穏な状況が続いたためリスパダール液 1mg/ml　1ml が処方された　妻が服用させたところ傾眠傾向ふらつきが出て、デイサービスに行っても眠りっぱなしになったため Dr に連絡 0.5ml のものに変更　穏やかに生活できるようになった
過量投与	患者の年齢:87 歳(女性)基礎疾患:高血圧、脳梗塞後遺症　基礎情報:高齢の夫婦のみの世帯でエレベーターのないマンションの 4 階に住まい。妻は脚が悪くここ数年殆ど外出はしたことがなく、家の中でテレビを観て過ごしている。健康への不安が強く、一日中血圧を測り上が 150 を越すと頓服のアダラートを服用、またハルシオン、デパス等、睡眠薬や抗不安剤を主人に処方された分まで勝手にのんで常用量を超えていると注意をしても「歳だから好きにさせて。」と医療者の言葉に耳を貸そうとしなかった。発見の経緯:主人が薬を薬局に取りに来るのがあまりにも頻繁なので薬局側から医療機関側に連絡。患者側は気が進まないようだったが医師が「家の様子を見に行きたい。」と言うことで在宅が始まり薬局も関与することになったが、脳梗塞の既往はあるが後遺症は殆どなく主病としては高血

	圧くらいであったが、立ち上がって歩くことが出来ず、はって家の中を移動していた。明らかに睡眠薬、抗不安薬の適量投与によるADLの低下と思われた。対処:主治医と相談し、毎週、薬を一包化しカレンダーにセットをしに薬局から訪問し服薬状況の確認を行なった。結果はその都度主治医、看護師に文書で情報提供をした。そうすることで自身もきちんと納得して服薬ができるようになり、現在は ADL が向上し階下に降りて美容院にも行けるまでになった。
過量服用	70歳　女性　パーキンソン病により、アリセプト錠を服用開始。初回の2週間は、3mg錠　1錠服用し、その後、5mg錠　1錠を服用するとの処方内容。数日後、患者家族から本人が急な嘔気、脈の乱れが起こっていると電話連絡があった。薬歴から、アリセプト錠の残数について患者家族に確認したところ、3mg錠を2週間服用してから5mg錠を服用するべきところを、毎日8mg(3mg錠1錠+5mg錠1錠)服用していたことが確認された。脈の乱れ、嘔気の状況から予定外の受診となり、症状は翌日改善した。患者は独居であったこともあり、次回以降、患者家族が受診、服薬に関わることとなった。
併用禁忌	72歳　女性　リウマチ･高血圧･静脈血栓症　発見のきっかけは、リウマチ薬の服薬指導中に併用薬を確認したところ、他医院より投薬されたワーファリンを服用中。ふくらはぎが腫れ、静脈血栓症との診断されたとのこと、胸の苦しさがあり、しんどいとの訴え、リウマチ科より処方されたエビスタ錠を 2 年前から服用中のため、エビスタ錠による副作用が疑われた。対処としては、リウマチ科に静脈血栓症の既往ある患者へのエビスタ錠服用は禁忌である旨を報告し、処方中止となる。その後、3～4ヶ月でふくらはぎの腫れは改善した。問題点としては、患者が副作用とは気づかず、別の病気を疑って他医院を受診するために、原因がわかりにくくなることである。
副作用の早期発見	85才女性;Af、認知症　As、LK、閉塞性動脈疾患　骨ソショウ症　不整脈　1人暮し　借家の大家さんが面倒を見ている　服薬が出来ていないとの事で訪問服薬指導に入り、毎日の服薬が出来る様になったら、ギゴキシン中毒となる　訪問した薬剤師が「気持ちが悪く、食欲がない」という御本人の訴えと嘔気止めの薬が出ていたことから主治医にジゴキシンの血中濃度測定を依頼ジギ中と判明　すぐに減量となり、その后の経過良好。
睡眠薬の科量投与	85才女性②高血圧、DM、頻尿③独居④きっかけは、夜中に4～5回おきた時、ふらつくという訴え。数回転倒しそうになったこともあるという情報が本人より。夜、眠れない時にマイスリー(5)が処方された。一時点な不眠症で、そ

	の後はのまなくても眠れるような感じだったが、1xvds に継続して服用していた情報提供書にて、マイスリーの必要性の有無の検討を主治医に依頼。→マイスリー中止となったが、不眠の症状もなく、トイレにおきるが、ふらつきはなくなった
緩和医療	71 才女性　仙骨脊索腫 ope 後。右腎不全にて、腎ろう造設その他合併症有り。独居生活は、困難となり、入院加療、その後グループホーム入所中。キーパーソンは、近隣の市に住む娘さんであるが、同居は困難な為、医療機関受診時に付添い、その他に 1 ヶ月に 1～2 回面会に訪れている。(独居していたが、入院前から、オキシコンチン錠、オキノーム散にて、疼痛管理していた。) グループホーム入所と同時に薬剤師居宅管理指導を開始。痛みの訴えと、オキシコンチン錠、オキノーム散の用量から、増量も試られたが、症状に変化なく経過。訪問していくうちに、不安感による不眠と痛みの関連が大きく、純粋な疼痛の訴えとは、異なるとの印象を受けた。病棟での患者の訴えも同様であったとの情報を得て、(再度、情報収集の結果)、主治医への情報提供書に数回この点についての情報提供とした。その後、腫瘍専門医の診察後、鎮痛補助薬の追加となり、疼痛緩和され、現在オキノーム散のレスキューはゼロで経緯している。ここに至るまでは、オキノーム散による眠気を目的とした頓用も度々あったと思われる。グループホームのスタッフからの聞き取りから、スタッフが毎日記録している　介護記録を毎週主治医に提出するようアドバイスし、服用中の薬剤による副作用のうち、便秘を避けることなど基本的な事を理解してもらい、そこから徐々に、患者だけでなく、スタッフのサポートに対して必要な服薬指導を行なった。副作用回避という観点から言うと、麻薬の不必要な摂取を回避できたことによる、副作用回避ができたと考えられる。
副作用の発症	70 代男性、脊椎損傷による下半身麻痺　奥様が主介護者でキーパーソン。訪問中の奥様からの相談で発見①夕食後しばらくすると不穏な状態になり、困っている。翌日その事を全く覚えていない様子との事。認知症になりかけているのでは?と心配　・眠前服用のレンドルミンによる一過性けん忘の可能性を凝い、服用時刻を質問したところ夕食後服用薬と同時に使用していたため、就寝前に分けての服用を指導、その夜から不穏状態消失したことを確認、Dr に報告した。・その後他の睡眠導入剤服用患者に確認したところ似たような症状を何人か経験されていた。
過量投与	92 才女性独居・高血圧、慢性胃炎、骨粗鬆症、不眠症・キーパーソン弟(82 才)・(アルダクトン A 錠 25mg1T　ディオバン錠 80mg1T　アーチスト錠 10mg1T) 分 1 朝食後　アダラート L 錠 10mg1T 分 1 夕食後・デイサービスで入浴直後気を

	失う。その旨ケアマネージャーより連絡あり、血圧測定を依頼し、血圧低下を確認し、医師にアダラートL錠10mg中止について、提案し、減量となり以後血圧コントロール良好。
副作用の早期発見	55才女性・うつ症状・パキシル錠10mg2T、ナウゼリン錠10mg1T分1夕食後服用・窓口にて"手のふるえ"の有無を聞くと、娘や友達から、食事の際に右手のハシのふるえを指摘された・医師に照会し、ナウゼリンのSEの可能性を話し、ナウゼリン服用中止となる。その後、振戦停止。
副作用（浮腫）	87才○高血圧症、高脂血症、糖尿病○患者宅訪問時の患者の様子から発見。ちょうど年末年始にかけて、顔がむくんでいる様に感じたが体重の増加もあり、足を観せてもらってその兆候があると思われた。○訪問薬剤管理指導報告書に記載すると共に、患者にも、副作用についての説明をし次回往診時に医師に尋ねる様にも指導しておいた。その結果医師の診察によりアクトス中止となった。
緩和医療	73歳　女性　乳癌術後　独居(娘さん横浜在住)　○がん性疼痛のコントロールのため、デュロテップMT12.6mg使用痛みの訴えが痛くオキノームの服用回数が増加するものの1回5mg服用で効果がみられることもあり、デュロテップルMTの鎮痛耐性、パッチの効果不十分も考えられ、在宅医へオキシコンチン錠80mg/dayへのローテーションを提案、変更となる。変更後、レスキュー:オキノーム服用回数減少。コントロール良好。
相互作用回避	小児科でジヒデルゴット処方されていた(午前中の血圧を上げて身体の動きを良くする為)事を耳鼻科医師に伝えなかったので併用禁忌のクラリスが処方された。外来患者アンケートからわかっていたので耳鼻科のクラリスを変更してもらった。
過量服用	78才　脊柱管狭窄症、胃潰瘍、心肥大、心不全　・日中独居、長男(56才)と2人で暮しているが、長男は離婚歴がある。時々、孫の訪問もある。・長男は、仕事で朝6時出勤し、夜10時頃帰宅する。・訪門看護の連絡ノートにて下痢が続いている事を知る。頓服ロペミン等で対応するが改善せず。・2週間前より、サイトテック3Tの処方が開始されていた。・循環器用剤も含め12種類の服薬中である。・ロペミン服用(効果あり)中は良いが、再び下痢に。サイトテックのSEを疑い、訪問医に相談。ムコスタ、変更後下痢改善される。
副作用症例への対応	92才女性　慢性関節リウマチ　骨粗鬆症　胃潰瘍　高血圧症　骨粗鬆症にボナロン週に1回服用型を服用した所胃痛、胸やけの様な症状が段々発症に至り、毎日服用型のアクトネルに変更しても症状が消失せず、再度Drに処方の

	件を相談しエビスタ錠に処方変更した所、胃痛、胸やけの症状が少しずつ消失し現在に至る
	79 才(女性)　高血圧症、糖尿病、高脂質血症、御主人と 2 人暮。義娘別居、受診時同併する。外出時ふらつきありと、担当ヘルパーの報告、担当ケアマネ通して連絡あり、訪門時状況確認。生活への意欲、食欲の改善もあり。服用中であったドグマチールによるパーキンソン様症状が疑われた為次受診時に医師へ伝わる様に、お薬手帳の記入、同伴する家族にもその旨伝えた。以後処方よりドクマチール削除となり、パーキンソン様症状ふらつき等消失。日常生活の改善が認められた。
製剤の使い方	89 才女性(当時)高齢で独居。・アンタップ R を 1 日 1 枚使用・ヘルパーさんが食事の用意と、一包化されたお薬を 1 日分テーブルに置いていました。アンタップ R は自分で貼っていました。・アンタップ R の残薬も多少、残っている時もありましたが、概ね、良好だと思っていました。・患者さんとお話しをして、「貼り薬は毎日貼っていますか?」との問いにも「毎日きちんと貼っている」と返答されていましたが、良く聞くと、1 度貼って数日、貼りっぱなしや、他の場所に新しく貼っても、昨日の分を剥さずに、2 枚貼っていたりとする様です。2 週間で 14 枚でも、毎日 1 枚を貼り換えられていないようでした。ヘルパーさんに聞いても、「2 枚貼ってあって、どちらが今日の分かわらなかったので、両方剥がして、新しく一枚貼る事がある。」とのことでした。医師へ連絡するとともに、ヘルパーさんにお願いして、1 包化したお薬の袋と、アンタップ R にマジックで日付を記入する事にしました。患者さん本人も日付を気にすることで、コンプライアンスが良くなったと思います。
副作用	89 才、男性、寝たきり、高血圧、腸炎、胃ろう　カゼをひかれ、内服と、ツロブテロール 2mg の貼り薬が処方される。深液 1:00 頃 TEL でけいれんしていると連絡入る。患家宅に行き、観察、けいれんというよりふるえを確認した。ツロブテロールをはがし 2 時間程様子みていたらふるえ止まる。朝、医師に報告し、使用中止の指示を受け、患者家族に説明した。

表 23 今後の在宅訪問管理の展開方針に関する調査に対する回答：アンケート調査にて、今後の在宅訪問管理の展開方針に関する記載を依頼した。得られた回答から代表的なものを抽出し、下記に記載した。

分類	具体的な記載内容
医師との連携強化	Dr.訪問日に一緒について回ることで、情報を得るような体制を整えたい。
	Dr からのアプローチだけで行っていた在宅を薬局からのアプローチで Dr に必要性をもとめ在宅訪問患者をふやしていきたい。
	医師の往診に 100%同行する。○現在も時間がある限り、同行しているが、人員不足で 100%同行できていない。同行することにより、薬局単独のみの訪問と比べ、患者様情報も多く収集できる。
例数増加	例数の増加に努める　薬剤師の少ない時は外出が不可能な場合があった。
無菌製剤・栄養管理	無菌調剤室を行ないたい。クリーンベンチは購入済、薬局のスペースの問題でまだ進行していない
	在宅時の高カロリー栄養剤など自費あつかいになっている部分のフォローを初期段階として管理栄養師でなく薬剤師が携わる。現在地域 NST ネットワークを作成しています。
	注射剤の混注ができるような設備投資。(ドラフイ内で輸液剤と麻薬の混注はやった事あり、抗癌剤等の無菌的な混注にはまだ地域内では一件も対応できないため)
	輸液剤を中心として、栄養管理を先導的に行なうことによって、より積極的に処方提案を行なう。
緩和ケア	ターミナルケアで痛みの緩和などに携って行きたい。
	末期の方の疼痛管理・麻薬管理
その他	薬剤師不足もあり今で手いっぱいの状態で一人の患者に多くの時間をかけられないのが現状でこれからの展開は今のところ未定又は考えられない状況
	今のところ展開する意志はありません。薬剤師不足が最大の障害です。
	マンパワーの不足により、十分に在宅訪問の要望に答えきれないため、薬剤師の確保に努めたい。
	血圧測定など、薬剤師として、許容範囲の医療行為。
	副作用を未然に防止するため、効果の確認　薬剤師によるバイタルサインの確認

表 24 在宅訪問指導を展開する上で解決すべき問題に関する調査に対する回答：アンケート調査にて、在宅訪問指導を展開する上で解決すべき問題を A: 自分の薬局で解決すべき問題、B: 処方医との間で解決すべき問題、C: 近隣の薬局の間で解決すべき問題および D: その他に分類して記載を依頼した。得られた回答から代表的なものを抽出し、下記に記載した。

分類	具体的な記載内容
A	少人数の薬局のため臨時処方への対応が難しい。
	在宅訪問するということは薬局を空ける時間が、出てくるため、営業時間外での活動も多くなります。1 人薬剤師の薬局が、どこまで活動できるのか従業員として薬剤師を雇うだけの経営力、求人紹介の場がもっとほしいです。
	在宅訪問にかかわる薬剤師数の確保、増員
	在宅訪問を任せられる薬剤師とそうではない薬剤師との差がなくなるよう全体的な底上げをすべき
	訪問する薬剤師の確保と、そのスキルアップ
	訪問患者に関する伝達不足が時々あるので特定職員だけでなく、すべての職員が均一に患者の一定の情報がさらにわかるようにしていく
	薬局と他の医療機関やコメディカルとの連携が十分ではない。訪問看護師らとの連携がとれるシステム作りが必要と思われる。
	「在宅訪問」という手段があることを、もっと積極的に患者家族の他、一般の人々にも認知していただけるよう広報する必要がある。
	在宅における、薬剤師へのニーズの開拓。
B	Dr へ積極的にアピールすること
	もっと在宅を増やせるはず。Dr.の指示が必要なためもっと連けいを取って行っていきたい。
	処方元の医療機関、もしくはケアマネージャーらのプランにおいて、薬剤師の関与は考えられていないのではないかと思う。具体的に、どのような役割ができるのかということを薬局自身がアピールすべきところと、「こういう事例は薬剤師に任せるべきだ」という指針がなければ変わらないのではないかと感じます。
	薬剤師が在宅訪問する必要性を病院、医師は感じてないと思う。現実に、在宅訪問している薬局は近隣で小数である。
	患者サマリーが乏しい。薬をとどける人としか見ていない(→情報提供書にいろいろ記載するが、その返答がない。)

C	在宅依頼を断る薬局がある。
	地域で在宅訪問に取り組む薬局が少ないため、横の連携が進まない。片道 10km ほどの患者宅への訪問も行っているが、近隣の薬局の協力が得られれば、業務の効率もあがり、緊急時の対応もすみやかに行なえると思う。
	他の薬局との情報の共有をするようにする。
	患者紹介などにより、遠方先の患者へ要する時間の短縮。
	訪問に興味があるが、実行してない薬局がほとんど。ノウハウの標準化をやりたい。いろいろな薬局が、参加し、同程度にサービスが行なえるよう、変えたい。
	実際に訪問を行う薬局と医療機関のマッチング作業
	薬剤師間における在宅情報交換会の設立。
D	HPN にかかる、材料費や加算の額が低いので、ディスポ、手袋、衣、帽子、注射器、針、ルート･バックなどで、足がでてしまう事がある。ルート等、要望に対応すると高くなる。
	麻薬の流通の緩和(地域間も含めて)･卸(門屋)の積極的な供給体制。
	土、日、祝などの時間外の麻薬の調達ができないこと。卸会社に時間外、日祝も麻薬を出庫してもらいたい
	医療の面でも介護の面でも書類作成の義務づけが多く、事務処理におわれてしまう

図1　Collaborative Drug Therapy Management（CDTM）の概念図

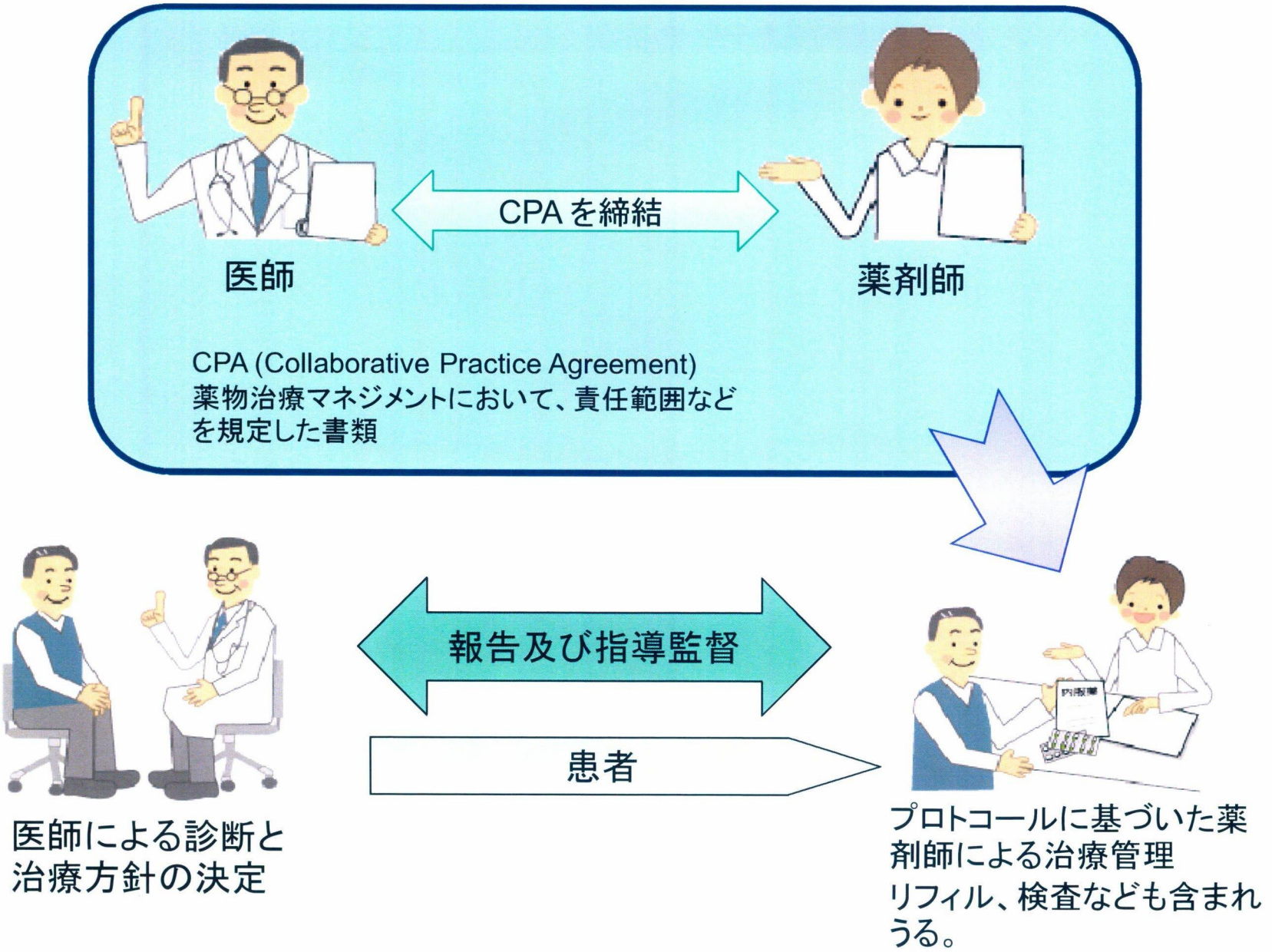

図2 英国における補助的処方者と独立処方者

1. 補助的処方者(Supplementary Prescriber)

✓特定の医師とコンビを組み、医師の処方を基に補足的に処方することが認められている(医師の診断・処方に基づき、モニタリングとその投薬量の調整)。

✓認められている資格者と医薬品

2001年5月～ 薬剤師と看護師のみ

→ 医師との治療方針に基づいていれば、麻薬や適応外処方も含め取り扱いに関する制限なし

2005年4月～ 検眼士、理学療法士、レントゲン技師、足治療士

→ 各専門分野の医薬品に制限

✓薬剤師の補助的処方者(2007年)

イングランド 約800人、

イギリス全土 約1,500人

2. 独立処方者(Independent Prescriber)

✓診断を伴い、医師以外による処方が認められている(ただし、専門分野・能力の範囲内という条件付き)。

✓認められている資格者と医薬品

2006年5月～ 薬剤師と看護師のみ

→ Drug Tariff(Part XVIIB)に規定される医薬品(未承認薬の処方は禁止)

✓トレーニングコースは、補助的処方と同様、大学薬学部が行う(薬剤師の場合)

✓薬剤師の独立処方者(～2007年)

イングランド400人以上、

添付資料１

アンケート調査用紙

～チーム医療における薬剤師による副作用の早期発見及び発生防止に関する調査研究～

以下のアンケートにご回答をお願い申し上げます。

本ファイルにご回答をご記入いただき、平成 22 年 2 月 15 日（月）までに、事務局（yakujimu.tky@gmail.com）あてにメール送付いただければ幸いでございます。

なお、*のついている設問につきましては、昨年６月における結果をご回答いただければと存じますが、直近の１－２週間のデータから１ヶ月分に換算していただいても結構でございます（この場合はその旨、ご記載ください）。

※回答欄に記入しきれない場合は、各自別紙を追加してご記入下さい。

回答者：役職　　氏名

設問		回答
1.	総病床数：	病床
2.	年間入院患者数：	名
3.	平均在院日数：	日
4.	病棟稼働率	%
5.	夜間休日体制：（２交代制、３交代制、オンコールなど）	
6.	薬剤部所属の薬剤師数（昨年６月時点）	名
	常勤薬剤師数（うち、治験を担当している薬剤師数）：***治験は別部門として設置***	名（ 名）
	非常勤薬剤師数（うち、治験を担当している薬剤師数）：	名（ 名）
	補助者（うち、治験を中心に担当している補助者） （ここでは、例えば業務時間の 30%を治験に充てている薬剤師が３名いる場合には、0.3 × 3＝0.9 名のように算出をお願い致します。）	名（ 名）
7.	病棟専従薬剤師数（昨年６月時点）： （業務時間の 80%以上を病棟業務に充てている薬剤師数）	名
8.	病棟専任薬剤師数（昨年６月時点）： （業務時間の 40～80%以上を病棟業務に充てている薬剤師数）	名
9.	病棟兼任薬剤師数（昨年６月時点）： （病棟業務に携わっているが、業務時間の 40%以下しか充てられない薬剤師数）	名
10.	各病棟に専従薬剤師を配置したときに、必要とされる全薬剤師数： （セントラルの調剤部門や薬品情報部門などもすべて含め、薬剤部において必要とされる全薬剤師数をご回答ください。現在の定員についてはご考慮いただかなくて結構です。）	名
11.	一ヶ月間（昨年６月*）の薬剤管理指導の算定件数：	件
12.	病棟専従薬剤師が配置されている診療科数（昨年６月時点、含下記救急病棟）：	診療科
	混合病棟の場合は上記設問は空欄とし、病棟専従薬剤師が配置されている病棟数：	病棟
	ICU/CCU/NICU など、救急病棟に専従薬剤師が配置されている場合は、救急科名と配属人数（昨年６月時点）：	科名： 人数：
13.	病棟専任薬剤師が配置されている診療科数（昨年６月時点、含下記救急病棟）：	診療科

	混合病棟の場合は上記設問は空欄とし、病棟専任薬剤師が配置されている病棟数：	病棟
	ICU/CCU/NICU など、救急病棟に専任薬剤師が配置されている場合は、救急科名と配属人数（昨年６月時点）：	科名： 人数：
14.	病棟兼任薬剤師が配置されている診療科数（昨年６月時点、含下記救急病棟）：	診療科
	混合病棟の場合は上記設問は空欄とし、病棟兼任薬剤師が配置されている病棟数：	病棟
	ICU/CCU/NICU など、救急病棟に兼任薬剤師が配置されている場合は、救急科名と配属人数（昨年６月時点）	科名： 人数：　名
15.	上記の質問に関連させて、全診療科数：	診療科
15'.	混合病棟の場合は上記設問は空欄とし、全病棟数：	病棟
16.	薬剤師がカンファレンスに出席している診療科数（昨年６月時点）	診療科
17.	薬剤師が ICU/CCU/NICU などの救急病棟のカンファレンスに出席している場合は、その診療科名（昨年６月時点）	科名：
18.	入院処方箋枚数（昨年６月一ヶ月当たり*）	
	内服剤・外用剤	枚
	注射剤	枚
19.	処方鑑査時の疑義照会率（院外処方を除く）（昨年６月一ヶ月当たり*）：	
	内服剤・外用剤	%
	注射剤	%
	内服剤・外用剤と注射剤を分けていない場合は、全処方に対する疑義照会率をお答えください。	%
20.	疑義照会後の処方変更率（院外処方を除く）（昨年６月一ヶ月当たり*）：	
	内服剤・外用剤	%
	注射剤	%
	内服剤・外用剤と注射剤を分けていない場合は、全処方に対する変更率をお答えください。	%
21.	チーム医療の体制と、他職種との関わりの例： （下記の例を参考にして、この１－２年程度について、最大５件程度までご回答ください。） 例①：医師・看護師・薬剤師がチームを組んで入院患者対応をしており、薬剤師が存在する状態で処方がなされる。	
22.	一般病棟における病棟服薬指導時に副作用を早期発見し、処方提案した具体例： （別紙の例を参考にして、この１－２年程度について、最大５件程度までご回答ください）	
23.	ICU 等の救急病棟に薬剤師が常駐することにより、副作用の早期発見、未然防止が可能となった具体例： （別紙の例を参考にして、この１－２年程度について、最大５件程度までご回答ください）	

24.	病棟カンファランス時の処方提言により副作用を未然に防ぐことができた具体例： （別紙の例を参考にして、この１－２年程度について、最大５件程度までご回答ください）	
25.	薬物血中濃度解析に基づく一ヶ月間の処方提案数（昨年６月*）：	
26.	薬物血中濃度解析に基づく処方提案が受け入れられた率（昨年６月*）：	％
27.	がん化学療法における抗がん剤レジメン選択や、抗がん剤処方の提案を薬剤師が行なっているか否かご回答ください（支持療法、緩和を除く）（昨年６月時点）：	
28.	専門薬剤師数： がん専門薬剤師：（　　名）　感染制御専門薬剤師：（　　名） 精神科専門薬剤師：（　　名）　妊婦・授乳婦専門薬剤師：（　　名） がん薬物療法認定薬剤師：（　　名）　日本医療薬学会指導薬剤師：（　　名） 日本医療薬学会認定薬剤師：（　　名）　糖尿病療養指導士：（　　名） その他、認定・専門薬剤師（名称と人数をご回答ください）：	
29.	各種専門薬剤師・認定薬剤師が、それぞれの専門性を活かした活動の具体例 （最大５件程度）： 例①：抗がん剤支持療法の提案	
30.	各種専門薬剤師・認定薬剤師が、それぞれの専門性を活かして、今後行なうべき活動の具体例 （最大５件程度） 例①：抗がん剤レジメンの提案	

31.	薬品情報室に配属されている薬剤師数： 専従：(　　名)　専任：(　　名)　兼任：(　　名)　常時在室人数：　(　　名)
32.	薬品情報室への問い合わせ（受動的情報提供）についてご回答ください（昨年６月*） 薬品情報室への問い合わせ件数：30 件 問い合わせ者の割合（医師：看護師：その他　＝　　：　：　：） 問い合わせについて、外来処方と入院処方の割合　（外来：入院　＝　：　） 特に多い問い合わせの内容を３種類までご回答ください （記載例：副作用、相互作用、識別、配合変化　など）
33.	薬品情報室からの能動的情報提供の方法についてご回答ください。 （例えば、医療従事者対象の情報冊子・情報紙等の配布掲示物の種類と内容、それぞれ何部ずつ、年何回発行しているかなど）
34.	緊急安全性情報、医薬品医療機器等安全性情報の院内周知手段についてご回答ください。 （例えば、医療従事者に対するダイレクトメール、電子メール、病院の web 掲載、カンファレンスでの通達、病棟担当薬剤師からの印刷媒体配布など）
35.	添付文書改訂情報の院内周知手段についてご回答ください。 （例えば、医療従事者に対するダイレクトメール、電子メール、病院の web 掲載、カンファレンスでの通達、病棟担当薬剤師からの印刷媒体配布など）
36.	企業や公的機関からの情報以外に海外文献等の情報を基に独自に情報提供した事例： （別紙の例を参考にして、この数年間について、最大５件程度までご回答ください）
37.	薬品情報室で作成している患者向け情報誌等 （情報媒体の種類と内容などについてご回答ください）
38.	薬事委員会開催について 開催頻度（月何回開催されているか）：(月１回）年 12 回 １回の会議で採用が審議される平均品目数：(　　５品目) 薬品情報室薬剤師の関与についてご回答ください

	（例えば事務局として出席、資料作成を担当、会議にての薬剤の特徴の説明など）
39.	そのほか、貴施設の特記すべき薬品情報室の情報提供活動についてご回答ください （例：薬品情報担当としてカンファレンスや院内委員会への出席、院内ガイドラインの作成、院内の情報システムの構築への関与など）

以上、ご協力誠に有難うございました。

設問１　貴施設の情報に関してお伺いいたします。

1-1.　薬剤師数

1) 常勤薬剤師　　＿＿＿名

2) 非常勤薬剤師　　＿＿＿名

1-2. 処方箋枚数　　約＿＿＿＿＿枚/月

1) 疑義照会を行った処方箋の割合　　約＿＿＿＿%

2) 1)の中で、疑義照会の結果、処方内容が変更となった割合　約＿＿＿＿%

1-3. 在宅訪問指導算定件数　　約＿＿＿＿件/月

※在宅患者訪問薬剤管理指導料・居宅療養管理指導料の両方を含めます。

1-4. 薬剤師一人当たりの担当患者数　　＿＿＿＿人

※1 人の患者を複数名で担当するなど、人数で標記することが困難な場合は、下のフリーコメント欄に具体的に御記載ください。

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1-5. 患者一人１回当たりの訪問に要する平均時間について

1) 患者宅・入居施設への往復に要する時間　　約＿＿＿＿分

2) 患者宅・入居施設における指導に要する時間　　約＿＿＿＿分

1-6. 在宅訪問指導算定対象患者の背景について

1) 独居の方の割合　　約　　%

2) 老齢介護の方の割合　　約　　%

3) 患者宅と主治医が所属する診療施設の往復に要する時間　　約　　分

※不明の場合は、回答欄に「不明」と御記載ください。

設問 2　貴施設における在宅訪問の具体的な内容についてお伺いいたします。

2-1. 在宅訪問指導対象患者の入退院時における病院職員との情報伝達の有無、方法について具体的に御記載ください。

2-2. 薬剤師がかかわることによって、副作用を未然に防止できた・あるいは副作用の重篤化を防ぐことができた具体例を最大 10 件程度御記載ください。その際、以下の内容について可能な限り御記載ください。

□記載対象患者の年齢

□基礎疾患

□キーパーソン等の基礎情報

□発見のきっかけとなった経緯

例）①患者宅訪問時に患者の様子（具体的な様子の記載をお願い致します）を観察する過程で気づいた

②連絡ノートの類の記載から兆候（具体的な兆候の記載をお願い致します）を読み取ることで気づいた

③窓口での服薬指導時に気づいた（具体的にどのようにして気づいたかの記載をお願い致します）

□副作用に気づいた後、どのように対処したか

例）医師、看護師らとカンファレンスを実施し、薬の中止や変更を検討。

—

2-3. 今後、貴施設において展開していこうとしている在宅訪問における活動の具体的内容について、最大 5 件程度をご回答ください。